

私の専門は宗教学、しよれば近代日本宗教史と現代宗教論・比較宗教運動論、ここ10年ほどは生命倫理と死生学ということになる。東洋哲学研究所の方々とは、これらの多くの領域で接点があった。最初は、ブライアン・ウィルソンさんをはじめとする欧米の宗教学者、学者の仕事をめぐるものだった。国際宗教学会（SISR）では長らくおつきあい頂いた。日本から、アジアからの現代宗教論・比較宗教論を掲げて奮闘す

長年の交流に感謝して——一人の宗教学徒として

島 蘭 進

の応用倫理問題も含め、広い間口はますます広くオープンにして頂きたい。だが、今後、さらに充実させて頂きたいと思うのは、仏法論、仏教論、あるいは宗教的世界観・死生観についてだ。宗教の教えの核心に関わるところだが、私もこのところ宗教学者として、やはりここに関心が向かうようになってきた。教義論争をしたいというわけではない。やはり宗教ならではの慰めや力についてもっとよく理解したいと思う。自分

が受け継いで

きた日本の仏

法・仏教の歴

る場で応援して頂いたことはよい思い出。その後、近代日本宗教史ということでは牧口常三郎論の取り組みが多かった。教育学者としての牧口の郷土教育論を

中心にだいぶこだわったが、まだすっきりしていない。いろいろと刺激を頂いたので、私なりの牧口論は何とか形にしたいと思っている。

生命倫理の議論も続けさせて頂きたい領域だ。日本の宗教界からの生命倫理論はまだまだこれからだ。他

史の意義を大きく捉え返したい。その中で近代法華仏教の意義をもとに考えていく機会をもてばうれしい。

宗教研究機関は現代世界の諸問題に敏速に対応するとともに、時流を超えた宗教の奥深いところとの接触感も失わないことが望ましい。だが、これは言うはやすく実行するのは難しい。東洋哲学研究所がそうした方向へとさらに前進して下さることを切に願っている。

（しまのすすむ／日本宗教学会元会長、東京大学大学院教授）